防医大進学紀要　第 44 号　35－45　2021

ローゼ・アウスレンダーの「雨」が意味するもの
―スピノザ哲学が与えたその影響について―

Bedeutung von „Regen“ bei Rose Ausländer
―Über den Einfluss von Spinozas Philosophie―

長田　浩
(German Laboratory)

（2021 年 1 月 4 日受理）

ローゼ・アウスレンダー (1901-1988) の詩のテーマは、故郷のヴィコビナを歌ったもの、ユダヤ人として体験したホロコーストを綴ったもの、愛、老いと死を扱ったものなど多岐にわたる。言葉そのものをテーマにした詩も多くある。

そんなアウスレンダーの詩作において、彼女がしばしば用いたモチーフは「雨」である。古今、雨に作者の心情を投影した詩は多くある。雨の降るありさまを自分の涙に例えたり、雨のなかで最愛の人を失った悲しみを噛みしめていたり、あるいは子どもが傘を差しながら長靴で水たまりを歩く喜びとともに描かれたりする。しかしアウスレンダーの雨の詩は、そうした詩とはどこか違うのである。彼女の雨の詩を読んでいると、雨がまるで生きているように、さながら息をしながら私たちに語りかけてくるように思える。そこには物質としての雨を越えた生々しさがある。この小論では、彼女の雨の詩をいくつか取り上げながら、そうした雨の生命力や身体性とも言うべきものがどこから生まれているのか、その秘密を探ってみたい。

「雨の言葉」という題名のついた次の詩はアウスレンダーの比較的晩年の作と考えられる。わずか 8 行ほどの詩である。難解ではあるが、視点の展開の意外さは、詩に動的かつ重層的な魅力を与えている。彼女の多くの雨の詩のなかでも、ここで取り上げたい特徴がよく表れていると考えられるため、詳しく分析してみたい。

アウスレンダーの全集の編者でもあるヘルムート・ブラウンは、彼の編んだレクラム文庫の彼女の詩集に『雨の言葉』という題名をつけている [1]。また日本で出版された加藤丈雄によるアウスレンダーの訳詩集の題名としても使用されている [2]。両人とも彼女の詩のひとつひとつが彼女の雨の言葉である、と感じての選択だったと思われる。

---

[1] Ausländer, Rose: Regenwörter. Herausgegen von Helmut Braun. Stuttgart 1998.
[2] ローゼ・アウスレンダー：『雨の言葉　ローゼ・アウスレンダー詩集』、思潮社、2007 年。

Regenwörter (Bd6 311)[3)]

Regenwörter
überfluten mich

Von Tropfen aufgesogen
in die Wolken geschwemmt
ich regne
in den offenen
Scharflachmund
des Mohns

雨の言葉

雨の言葉が
わたしに溢れる

雫によって吸い込まれ
雲のなかへと押し流されて
わたしは雨となって降り注ぐ
開いた
罌粟の
緋色の口のなかへ

題名の「雨の言葉」は原文では Regenwörter であり、合成語の後半は Wort の複数形の Wörter が用いられている。おそらくは複数といっても、2 つ 3 つではない、雨粒の数と同様に無数の言葉なのであろう。だからこそ「雨の言葉が / わたしに溢れる」のである。

2 節目になると、雨の言葉を聞いていたはずの「わたし」は、雫によって吸い込まれて、雲のなかへと上昇する。auf/saugen という言葉は、ふつう「吸い込む、吸収する」という意味で使われるが、ここでは前綴りの auf に「上へ」という意味が込められているかも知れない。「わたし」は水そのものになり、主体と客体の境界線が揺らいで

3) テキストは Fischer 社より 1984 年から 1990 年に出版された 8 巻本の全集 (Rose Ausländer Gesammelte Werke, Herausgegeben von Helmut Braun) を用いた。引用の際にはその巻数とページ数を略記号にして示した。なおここでの詩の翻訳はすべて拙訳である。

いる。こうした揺らぎがアウスレンダーの雨の詩における大きな特徴である。加えて雲のなかへと上昇する動きが、「わたし」と一体化した雫の生命力を伝えている。

雲のなかへと押し流された雫は、「雨となって降りそそぐ」。ここは原文では ich regne となっている。regnen「雨が降る」というドイツ語は、おもに非人称の主語 es（英語の it）をともなって使用される。それ以外の用法では、自動詞として「（花びらなどが）雨のように降りそそぐ」のように、比喩的な用い方がある。ここでは後者の自動詞としての用法であるが、「わたし」は「雨」と完全に同一化していると考えられるため、「雨のように降りそそぐ」ではなくて、「雨となって降りそそぐ」と訳した。

こうした同一化の表現は、たとえば、「ふたたび (Wieder)」(Bd4 85) という 6 行からなる詩のなかでも見られる。「ふたたび私から水をつくりだしなさい // 勢いよく私は流れたい / 大河のなかで // 海のなかへ / 流れ込みたい」。

「雨の言葉」においても「ふたたび」と同様に、水は流れに合流し、海へと流れ込み、雲に上り、雨となって大地に降る。「雨の言葉」の詩においてはダイナミックな動きは、より際だっている。読者には上りと下りでの時系列ははっきりと示されておらず、イメージがいわば同時並行的にわき上がる。アウスレンダーは「いま」、この瞬間を大切にした詩人であり、この詩でも「いま」にすべてが集約されていて、過去も未来も同時進行的に描かれている。

最後の 3 行の「開いた / 罌粟の / 緋色の口のなかへ」という表現は、他の詩でも用いられている。題名のない「友よ」という呼びかけで始まる詩のなかで、「君の唇の罌粟のたわむれ」（Bd7 312）と、友人の唇が罌粟にたとえられている。「雨の言葉」で歌われている「緋色の口」も同様に罌粟と唇の緋色の共通点から生み出された、人の唇と考えてよいだろう。そしておそらくはこの唇は詩人である「わたし」自身のそれにちがいない。

重要なのは、雨が「口」のなかへ降りそそぐ点である。口は言葉と密接に関係している器官である。「わたし」自身が雨となり、その雨が「わたし」の緋色の口のなかへ降りそそぐとは、なんと鮮烈なイメージであろう。動きとともに、雨の無色のなかで緋色は読者に忘れられない印象を残す。

そしてこれはおそらく、詩人自身の言葉、すなわち詩を書くことを表現しているのだろう。詩人は雨となり、詩を紡ぎ出す自らの口のなかへ降りそそぐのである。詩人は言葉を飲み込むことによって、それを糧として詩作をするのであろう。

詩人自身の書くことの意味がここで語られているとすると、すでに他の拙論でも何度も紹介してきたことであるが、彼女の生涯についてどうしてもここで触れておく必要があるので、簡単に述べてみたい。

アウスレンダーはユダヤ人として、祖国から離れ、さまざまな国をさまよい歩いた詩人であった。彼女はユダヤ教とは距離を置いたリベラルな家庭に育った。第 1 次世界大戦中の 1916 年に、生まれ育った旧オーストリアのチェルノヴィッツを離れ、ウィーンに 2 年間滞在した。そして故郷に戻ったときチェルノヴィッツはルーマニア領になっていた。その後、1920 年には父の死による経済的理由でアメリカへ移住し、結婚、離婚を経て、1931 年に再び故郷に戻った。そこで 1941 年のナチスによるチェルノヴィッツ侵攻に始まるユダヤ人迫害を体験した。深い傷を負ったまま、1946 年

に再度アメリカへ渡航し、ウィーンに戻ったのは1963年のことであった。1965年にドイツに移住し、最後はデュッセルドルフの施設で過ごし、1988年に亡くなった。

そうした放浪のなかで、アウスレンダーの詩の言葉を借りれば、「飛びながら / ブランコにのって / ヨーロッパ　アメリカ　ヨーロッパ」(Bd4 212) とさまよいながら、彼女のアイデンティティは不確かなものになった。彼女は晩年に至るまで、自らのアイデンティティを探し続けた。晩年となる1973年に、作家の老いをテーマに語ったラジオ番組で、「私は私自身を探している。私は自らを見つけたと思い、ふたたび自分を失い、私を探している。アイデンティティの追求」[4] と語っている。

アウスレンダーにとって、アイデンティティを追求することは、すなわち「書くこと」であった。その点、彼女自身が影響を受けたというフランツ・カフカとよく似ている。彼女もカフカもユダヤ人でありながら、ユダヤ教を信じてはいなかった。アウスレンダーの場合は、ホロコーストの体験があって、その後しばらくは、すでに「野蛮となった」ドイツ語で詩を書くことができず、英語のみで詩作したほどである。ふたたび彼女がドイツ語で書き始めるのは、1950年代後半のことで、それまでに実に長い時間を必要とした。祖国を離れ、母語すら失いかけ、自分を失うなかで、それでも彼女は書き続けた。生涯書いた詩の数は、2500を越える。晩年を過ごした老人施設のなかでも書き続けた。「書くこと」は彼女にとって息をすることと同義であった[5]。「雨の言葉」のなかで、雨になったわたしが、わたしの緋色の口に流れ込むのは、わたしと言葉のギリギリの共存関係を表しているように見える。

この小論で問題にしたいのは、この詩における 「わたし」が「雨」になって降り注ぐという表現・思想であり、そこへのベネディクトクス・デ・スピノザ (Benedictus De Spinoza 1632-1677) の影響である。アウスレンダーの雨の詩を解釈するにあたっては、汎心論的なスピノザの哲学を避けて通ることができない。しかしながら、これまで詳しく論じられてこなかったテーマである。スピノザの難解な哲学を語るのは筆者の手にあまるが、私の理解している範囲で述べてみたい。

アウスレンダーの父親はユダヤ教のラビになるよう育てられたけれども、自らの意思でチェルノヴィッツに出て商人になった人である。母はプロイセンのベルリン出身のドイツ系ユダヤ人である。そうした両親のもと、彼女は厳格なユダヤ教徒としてではなく、リベラルな雰囲気のなかで育てられた。

一方のスピノザも、祖先はスペイン系のユダヤ人で、オランダのアムステルダムのユダヤ人居住区に生まれている。スピノザの家庭も、アウスレンダーと同様に、比較的リベラル寄りの家であったようである。23歳の時には、信仰をめぐってユダヤ人教会から破門されていることからもわかるように、ユダヤ教からは距離をおいた人物である。

アウスレンダーがスピノザを尊敬していたことは、「スピノザ」という題名の詩を

---

[4] Ausländer, Rose: Materialien zu Leben und Werk. Frankfurt am Main 1992, S.65.

[5] 次の拙論を参考のこと。
長田浩：「ローゼ・アウスレンダーの＞息＜のモチーフをめぐって」、防衛医科大学校進学課程紀要、第42号、2019年、111-121ページ。

2 編書いていることからうかがえる。「スピノザ II (Spinoza II)」では、「私の聖人は / ベネディクトという // 彼は / 世界の宇宙を / 曇りなく磨いた // 無限の水晶 / その中心部から / 光が突き進む」(Bd5 263) と讃えている。スピノザは経済的な支援者もいたが、レンズ磨きで実際に生計を立てていたといわれている。彼女の詩ではそのレンズ磨きを「世界の宇宙」を磨くことに置き換えている。またここでスピノザのことを「ベネディクト」と言っているのも興味深い。というのもスピノザには３つのファーストネーム、「ベントー (Bento)」、「バールーフ (Baruch)」、「ベネディクトゥス (Benedictus)」があり、どれも「祝福された者」という意味であるが、最後の「ベネディクトゥス」は彼がユダヤ人教会から破門された後に名乗った名前であるからである。省略されて、アウスレンダーが用いたような「ベネディクト」と書いているときもある。この象徴的な名前の事情を彼女は知っていて、わざわざ詩のなかで使用したのかも知れない。

アウスレンダーは遅くともまだ 20 歳にならない 1919 年には、スピノザに触れている。チェルノヴィッツで実業中等学校の教師だったフリードリヒ・ケットナーが哲学に興味のある生徒や大学生を集めて、週に一度講義を行った。それに彼女も参加している。そこではプラントやスピノザ、とりわけ当時まだポツダムで生存していたユダヤ人の哲学者コンスタンティン・ブルンナーが取り上げられた [6]。後の 1937 年にニューヨークで、アウスレンダーは自分の詩の朗読とともに、「コンスタンティン・ブルンナーの哲学とスピノザの関係」というテーマの講演を英語で行っている [7]。また、晩年の 1971 年に発表された散文のなかで、「スピノザとブルンナーは私の思考に基盤を与えた」(Bd3 285) と彼女は述べている。

スピノザの代表作『エチカ』の第一部では、神の本性や特質について語られている。彼の語る神は、西洋の伝統的な神とは大きく異なっている。スピノザの神の定義について、ここでの限られた枚数でとても詳細に検討する余裕がないので、スピノザ研究者のチャールズ・ジャレットによるスピノザの神についての要約を紹介したい。

1) 感情や目標、計画を持たない。
2) 自由意志をもたない。
3) 物理的なものである（心的なものでもある）。
4)「世界」から切り離されたものではない。
5) 道徳的な特質（正義や慈善など）は内在していない。
6) （神の本質の中にある）我々には適切な方法で認識されている [8]。

スピノザの神は、自由意志ももたないし、道徳的な特質ももたないのであるから、従来の裁きの神とはまったく別物といってよく、それゆえ彼の思想が無神論であると言われるのである。『エチカ』では次のように定義されている。

---

[6] Braun, Helmut: Rose Ausländer zu ihrer Biographie. Stuttgart 1999, S.21.
[7] Ebd., S.51.
ブラウンによれば、もっともこの講演は、講演自体よりも、彼女の仲間たちが彼女にふたたびアメリカ国籍を得させるために、アメリカに呼び寄せる口実だったようである。
[8] ジャレット・チャールズ:『知の教科書　スピノザ』、石垣憲一訳、講談社、2015 年、58 ページ。

神とは、絶対に無限なる実有、言いかえればおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている実体、と解する。

（第 1 部定義 6）[9]

スピノザによれば、神は「無限」なのである。無限であることは外部をもたないということである。つまりは私たちも、万物も神に含まれるということになる。そうでなければ、神は無限ではなくなる。

神は唯一であること、言いかえれば自然のうちには一つの実体しかなく、そしてそれは絶対に無限なものであることになる。

（第 1 部定理 14 系 1）[10]

こうしたスピノザの考え方に習えば、「わたし」も「雨」も「神」であり、完全性を備えているということになる。もし「わたし」や「雨」が不完全であるように見えるとしたら、それは人間のもつ偏見によるものである。アウスレンダーの詩において、「わたし」が「雨」になるのは、こうしたスピノザの神、神というより宇宙といった方が分かりやすいかも知れないが、「神即自然」の思想が彼女にあってのことだと考えられる。『エチカ』においてこれについては次のようにも言われている。さまざまな解釈が成り立つ可能性のある難解な箇所でもある。

なぜなら、個物は神の属性をある一定の仕方で表現する様態である、言いかえればそれは神が存在し・活動する神の能力をある一定の仕方で表現する物である。

（第 3 部定理 6 証明）[11]

このスピノザの専門用語の「様態」、ラテン語では modus であるが、その難解な用語を國分功一郎は以下のようにわかりやすく解説している。

人間の存在は「神は人間みたいな仕方でも存在できるんだぞ」と、水の 存在は「神は水のような仕方でも存在できるんだぞ」と、太陽の存在は「神は太陽のような仕方でも存在できるんだぞ」と、それぞれの個物が神の力を 表現していると考えられるわけです。個物が「神が存在し・活動する神の能力をある一定の仕方で表現する」というのはそういう意味です [12]。

スピノザは万物を神の「変状 (affectio)」したものととらえた。変状とは「ある物が何らかの刺激を受け、一定の形態や性質を帯びること」[13] を意味する。つまり私たちを含めた万物は、神の存在の一つの「様態」なのである。アウスレンダーの「雨」も

---

[9] スピノザ：『エチカ（倫理学）上巻』、畠中尚志訳、岩波書店、2006 年、38 ページ。
[10] スピノザ：同上、53 ページ。
[11] スピノザ：同上、177 ページ。
[12] 國分功一郎：『はじめてのスピノザ』、講談社、2020 年、82 ページ。
[13] 國分功一郎：同上、82 ページ。

こうしたスピノザの存在様式の考え方に基づいていると考えられる。「わたし」も、私から変わった「雨」も神の「様態」の一つなのである。それは様態が変わったにすぎない。

「雨の言葉」においては、「雨の言葉が／わたしに溢れ」ていた。雨の言葉は「変状」した私ひとりの言葉であるかのようである。一方、次の詩では単一の声ではなく、雨のなかで聞こえてくるたくさんの声が語られている。

Im Augenblick (Bd6 309)

Wüßt ich
wieviele Namen
dieser Augenblick hat

Kinderstimme im Greis
das Stadtgespräch
geht über die Grenze
ein Mißverständnis
von Land zu Land
mein Ohr ertrinkt
im Redefluß

Jetzt bist du gestorben
wann wirst du geboren

Im Augenblick
regnet es

いま、このときに

わたしは知っているだろうか
どれほど多くの名前を
この瞬間がもっているか

老人のなかの子どもの声

街の会話は
国境を越えていく
誤解は国から国へと
わたしの耳は溺れる
多弁のなかで

いま、おまえは死んだ
いつ、おまえは生まれるのか

いま、このとき
雨が降っている

「雨の言葉」の詩では、わたし（詩人自身）が、雫となり、雲へと昇り、雨となり、ふたたび詩人の口のなかへ流れ込んだ。この詩では雨のなかで、「わたし」は、たくさんの声を聞いている。それは過去も未来も、「この瞬間」に集約されているからである。「老人のなかに子どもの声」という表現にそれはよく現れている。

時間の壁が消え去り、あるのが瞬間だけだとしたら、その一点にあらゆるものが集中する。聞こえてくる声は、生きている人のものばかりとは限らない。死者の声が聞こえても不思議ではない。詩人だけが雨に変状するのではない、すべての人が雨に姿を変える可能性があるとすれば、「いま、このときに」降っている雨は、時間を越えた人々の言葉であり、声である。とりわけアウスレンダーに聞こえてきた声は、死者の声であろう。故郷のチェルノヴィッツの 6 万人いたユダヤ人のうち、ホロコーストを経て、生き延びたのは、わずか 5 千人であった。彼女は何とか生き延びたものの、その亡くなった「多くの名前」をもつ同胞たちの声は、彼女の耳に生涯にわたって響き続けたはずである。それは叫びであったかも知れない。詩においても無数の雨粒の「多弁」のなかで詩人の「耳は溺れ」、それらの声を受け止めることができなくなりかけている。

その瞬間が過去だけでなく、未来も含まれるとしたら、死んだ者も、いつかまた生まれるだろう。「いつ、おまえは生まれるのか」という表現は、いや生まれはしないという反語とも解釈できるが、やはりある種の可能性が感じられる。

その可能性の意味について考察するために、最後にもうひとつだけアウスレンダーの詩を挙げたい。この詩においては、詩人は雨のなかで、よみがえった死者を感じ取っている。

Auferstanden II　(Bd6 310)

Auferstanden im Regen
die Toten
fallen über uns her
mit der Kraft Vergangner
lassen uns nicht allein
einen Augenblick

Wir leben mit ihnen
sie waschen uns gründlich
wie man Leichnahme wäscht
versprechen uns ewige Wohnung

Auferstanden
mit den Gestorbnen
wir gehen nicht unter im Strom
getauft von den Toten
mit Tränen

Da wächst unser Haar.
da wächst im Haar unser Tod

よみがえった

雨のなかでよみがえった
死者たちは
私たちに襲いかかる
過去の力とともに
私たちを放っておきはしない
一瞬たりとも

私たちは彼らとともに生き
彼らは私たちを入念に洗う
死体の名前を洗うようにして

彼らは私たちに永遠のすみかを約束する

死んだものたちとともに
よみがえり
私たちは流れのなかで沈まず
死者たちによって洗礼を施されながら
涙とともに

そのとき、私たちの髪が伸びる
そのとき、髪のなかで私たちの死が伸びる

auferstehen という動詞は雅語で、ふつうはキリストの復活などに用いられる宗教的な単語である。この動詞は過去形と過去分詞形が同形であるが、おそらくここでは過去形であり、倒置して文頭に置かれている。この詩で歌われている「復活」は、宗教的な響きはあるが、キリスト教に言われているような意味合いではないだろう。ここでもスピノザの哲学の影響があるように思える。彼は死について、『エチカ』の第 4 部で次のように述べているのである。

> 人間身体は死骸に変化する場合に限って死んだのだと認めなければならぬいかなる理由も存しないからである。かえって経験そのものは反対のことを教えるように見える。
>
> （第 4 部定理 39 備考）[14]

スピノザがここで死骸に変化してないにもかかわらず、死んだと認める例に挙げているのは、次のようなあるスペインの詩人についての話である。

> 彼は病気にかかり、そしてそれは回復したものの、彼は自分の過去の生活をすっかり忘れきって、自分が以前作った物語や悲劇を自分の作と信じなかったというのである。それでもし彼が母国語も忘れたとしたら、彼はたしかに大きな小児と見なされえたというべきであろう。
>
> （第 4 部定理 39 備考）[15]

先に述べたように、アウスレンダーはホロコーストの後、ドイツ語で詩を書くことをやめ、一度は「母国語を忘れた」詩人となった。その意味では死んだ人間であるといえるだろう。この詩においては過去に亡くなった多くの人々がよみがえり、雨のなかでわたしたちに襲いかかる。本性の様態が変化するなかで、死者は生きて

---

[14] スピノザ：『エチカ（倫理学）下巻』、畠中尚志訳、岩波書店、2006 年、53 ページ。
[15] スピノザ：同上、53 ページ。

いるものとなり、生者は死んでいるものとなり、彼らは死者とともに生きる。死者たちとともに生きることで、アウスレンダーは彼らと悲しみを共有する。「雨のなかで」とあるが、雨はただ背景として降っているのではなくて、死者も、私たちも雨そのものなのであろう。「涙」をともなってはいるけれども、私たちは流れに飲み込まれ、沈んでしまうことはない。死者たちによって私たちは「洗礼を施され」、「入念に洗われて」、「変状」するのである。詩の最後の 2 行は言語表現の凄みさえ感じさせる。よみがえった私たちは「髪が伸びる」ばかりでなく、その「髪のなかで私たちの死が伸びる」。その表現から、生と死ですら、存在のあり方の様式の違いでしかない、というアウスレンダーの確信が伝わってくるようである。生まれ変わること、ここにほのかな彼女の希望があるのかも知れない。

アウスレンダーはホロコーストを体験した詩人として、ユダヤ人の側から支持を得たが、その一方でメジャーになりきれていない。それはおそらくこうしたスピノザ哲学の影響が、ユダヤ教やキリスト教を信じる人たちには理解できないし、理解できたとしても受け入れ難かったせいなのかも知れない。しかし、まさにこうした彼女のスピノザに由来する世界観が彼女の詩を、民族を越えたコスモポリタンな文学に昇華させているのである。自己と非自己の境界を越えた命の可能性、誕生と死の枠組みを超えていく可能性を、アウスレンダーの詩は私たちに提示しているといえよう。